



繁華街ススキノの居酒屋で開催。研修会の後は交流会で盛り上がった

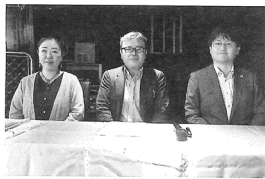
9月21日、日本アドバンス・ケア・プランニング(ACP)研究会(代表理事 三浦久幸)国立長寿医療研究センター在籍医療・地域医療連携推進部(長)の第9回年次大会が札幌市で開催される。多くの人に関心を持ってもらうと、主宰者や関係者によるプレ研修会が企画されている。5月24日には、札幌市で活動する介護・医療関連の有団体フライングネットによる研修会に約100人が参加。ACPについて学び合った。

フライングネットは、高齢・障害者としたところ、あつた障害者の相談支援を行うという間に参加者は100人に達した。

北海道ケアマネジメントサポーターネットワークや、地域の高齢者の主体的なサークル活動を支援するシニアネットなどを運営している奥田龍人さん、札幌市内でデイサービス運営する村中恵太さんが、主事している任意団体「はちがら」を運営している。札幌市の介護・医療現場の幅広い職種に向け、定期的に「学びと交流の場」を提供している。大々的にアナウンスしているわけではないが企画すればいつも満員御礼。5月24日は、秋のACP研究会の年次大会に向け、大谷長を務める医師・澤田格さん(西岡病院内科部長)らを招いての勉強会に紹介されてく

本人の意思を考え続けるACPサイクル定着を

ACP研究会年次大会に向け札幌で研修会



左から亀井さん、澤田さん、福田さん

る患者さんたちはみな、病状から全身状態が悪化している。終末期と言われた人です。ところが経口摂取できないと診断された人の7割以上が、実は口から食べることで生きています(亀井さん)。

医療から見放された患者でも再び生命力を取り戻すことができる。亀井さんはそれを「看護からできるエンターサイクル(生命力の回復)」だと表現する。健康を保つフィジカル面へのケアだけでなく、孤独にしない、意思を聞くメンタルへの働きかけ、そして家族への支援や役割を持つこと、社会とのつながりを取り戻すことなど、フィジカル部分まで、トータルにかかわることだ。こうしたケアの実践を積み重ねていけば、ACPに対して思うことは「意思にかなう、尊重する」ということだけでなく、その個人の生き方、生き様を知って心から支えたいと思うようになると。患者経験価値を高めるためのACPではない、か考えるようになり、した」と話した。

また、大会長を務める澤田さんと、弁護士・福田直之さん(札幌総合法律事務所)は、ACPについて医療行為への意向やリビングウィルと同じだという認識がまだあるわけではない、結論では「医療に軸足があるわけではない、結論ではなく全ての健康ステージを支えるプロセスである(澤田さん)と強調。厚生労働省のガイドラインを踏まえた「ACPサイクル」を本人で考え、家族や社会と共有し、本人を中心に、①「話す(医療のこと、気持ちなど)」「②「残す(書面など)」「③「伝える(家族や医療者、第三者への環境設定)」「④「見直す(折に触れ、タイミングよく)」を常に円を描くようにして、本人が自ら考えたり、家族等が本人の推定意思に基づいて考えるようにすることが大切だ。実際に2人で関わった事例では、経口摂取が困難なレベルの嚥下障害になっても胃ろうを拒否する高齢患者に対し、このACPサイクルを約3週行なったことで胃ろうは造設せず緩和ケアで療養継続

「変わる意思も変わらないうちに意思も確認する。見直す、繰り返すことが重要なことです(福田さん)」。情報共有ツールを使った記録には、2人が患者の状態をきめ細かく確認し、予後判断しながら、訪問して患者や家族と対話を繰り返している。義務や手続きではない、誰のためか、常に問い続けることが大切なのだろう。

ACP研究会では、7月にもプレ研修会を予定している。オンラインで参加費無料だ。詳細はホームページを。